代償

作＝かねたたき

「キャー！」

帰宅途中、公園を通り抜けようとしていた私の目の前に、１人の男が現れた。がっしりした体格のその男は、いきなり私の胸をわしづかみにした。

「やめてよ！」

まわりに人影はない。男は私の体を引き寄せようとする。

レイプされる、そう思った私は、その男の急所を膝で思い切り蹴り上げた。

男はくぐもった声を出し、股間を押さえてうずくまった。

「男なんてキンタマ蹴飛ばせばイチコロよ」

私は男の前に立ち、勝ち誇って言った。

「もう二度とこんなことをする気が起こらないように、お仕置きしてあげる」

私はうずくまっている男の顔面を蹴った。男は仰向けにひっくり返った。すかさず私はがらあきになった男の急所を、サッカーボールを蹴るように思い切り蹴った。

「どう、痛いでしょ。キンタマは男の急所だからね。私たち女にはその痛さはわからないけど」

男は仰向けのまま両手で股間を押さえた。

「かくすんじゃないわよ！」

手の上から股間を蹴ったが、あまりきいていないみたい。
そこで今度は顔面を踏みつけると、男は手で防ごうとし、また股間ががらあきになった。私はすかさず股間を蹴った。もう男は股間を押さえる気力も無いみたい。
「どうしたの？男のくせに女の私に手も足も出ないの？そりゃそうよね。だって男はキンタマっていう弱点をぶら下げているんだもんね。キンタマがついている限り、男は女に勝てないのよ」
股間を蹴り続けながら、男に言い放った。
「女の子を甘く見るとね、こういう目にあうのよ。男の急所がキンタマだってことぐらい、幼稚園の女の子でも知ってるんだからね。ちょっとでも変な気をおこしたら、すぐにキンタマ蹴飛ばされるわよ」
男はぐったりとして動かなくなった。私は男の両足首を持ち上げた。
「それじゃあ、最後の仕上げよ。キンタマ踏みつぶしてあげる」
男の表情が変わる。しかし気にせず私はかかとで男の股間を踏みにじった。
「どう、女の子にキンタマ踏みつぶされる気分は。ほら、タマつぶすわよ」
かかとをぐりぐりと動かすと、睾丸が変形していくのがわかった。
「これでとどめよ！」
全体重をかけると、ぶちっと音がして、真っ平らになった。
「どう？女の子からキンタマつぶされた気分は。あら、動けないの？　自業自得よね。女の子を

襲おうとする男は、キンタマを蹴りつぶされるのよ」
私は気絶している男を残して、公園をあとにした。